

一  
二  
三

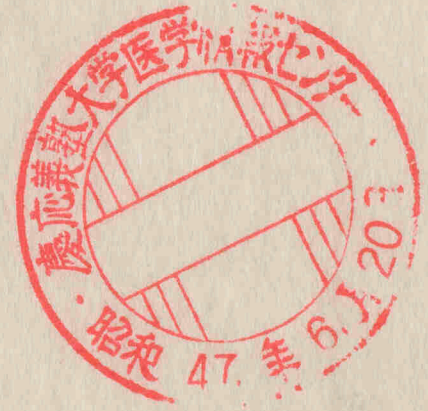
懷為子著帶之次史  
口傳

X  
k 13-2

F  
力  
28

385.2  
K

No. 2422  
12 K 13-2



富士川文庫



懐子著節之次第口傳

○ 总節祝儀の以前は眉並し従前の祝ひ  
多し近代总節同日は此祝をあるを方  
多し懐妊せしととも年次はあは眉を  
直し腹をつくへし

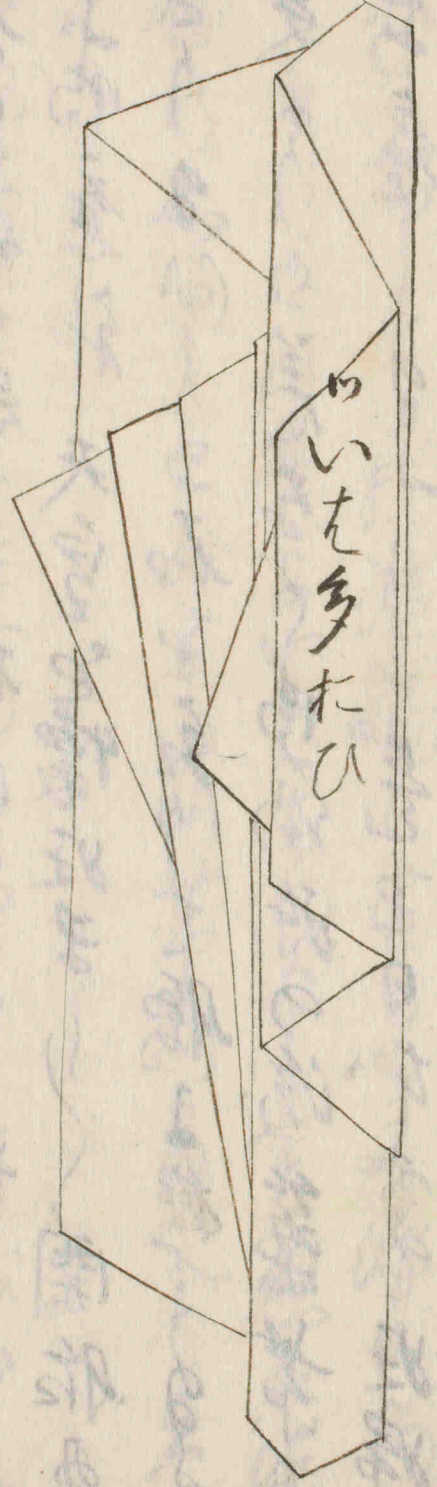
一月水留りて五月月目云々

○ 法統左の如し

懐節祝儀は南日をみ月目の十五日は定こと  
一魚日放さふ嫌は古来の法に之とも時宜は  
かりて十五日ともお浪の朝朝卿の由意新朝  
家を高懐妊の時永元年三月九日の总  
節一同実節を懐妊の時を建久三年四月二日

又教誨此口忌帯ハ文曆元年三月朔是以上皆  
 東鑑の所見之條ハ上右介十哲子之不限今  
 世とも又先之進一婦人の上めて不舊の  
 申收の除平を用るなるとしり物れも吉日  
 良辰と撰てけいをしるへ

○ け帯を纏帯といひ結肌帯とも云へ纏帯  
 ハ纏肌帯乃中略之結肌同し意いとい  
 内と音通之通例いささ帯と云へけ帯  
 の上包く上書るはいささ帯又此の字ハ  
 先の位より心次よりへ



○ 又志田帯と云も是も昔河内玉高女の家

藤田小次郎と云ものち九月十二日又交野の市  
 よおと酒をのむ其時一人の若妻よりとり

小次郎 別着酒をおた存懐ひ懐より酒を

あさふといふ小次郎はあしり酒をせ妻より  
 食せしむるよ妻あまより懐妊して十月月



新事向りして江戸に逗留を其新法公のより  
あけ婆より運上と出させたる事の中

浮集天牛立志著。植女の事山城公久世郡上

植村下植村有部ありて是を植の里と云小坊

仁古海の反代有部と云植女村有部田原世相

續して植女と稱を徳政免許ありて在徳を

此遠祖の神功皇后之韓征伐の時より首途を

祝ひたり依りて遠葉葉葉ありて白皇

后高産まりて其時の事腹帯を今より

物傳へりて一依りて植女と代りて其女子

と系嗣を傳ふ事胃と代りて此家より運上

女孫を續て下植村法没お勤志く内先祖植女

の姉妹分派ありて若植女系系嗣お續の女子

ありと云ふ事下植村の分派の家の子お續

と云ふ事植女男子を生産しても家嫡とせしと云

うく女子を以て家望と云而して其女子家望

となる時代友ありて由を告系礼を云系

法司代りて其礼より系上と云法司代りて

又まうせ買入と云下向りて將軍家より謁

見し贈物時腹白浪等を云下向りて家并

事連枝の口方より系謁を云之禁妻あり

系ある親王掎家ありて系ある是を新司代の子

まうせし事如先例志うりて植女を日代りて系

植女を名を勤る植女の事麻上下と云して

玄冥より先くちより集り、流縁の前中産後の際、  
白濁して中より白ひ只今、桂女系といふは、  
めると祿なく入来、桂女出立の跡、  
たる位を交り、  
帯より一よりあれたる被衣をうけ来り、  
更には、  
先所司代の口前より、  
と明させ、  
の上、  
より入来、  
居先、  
い、

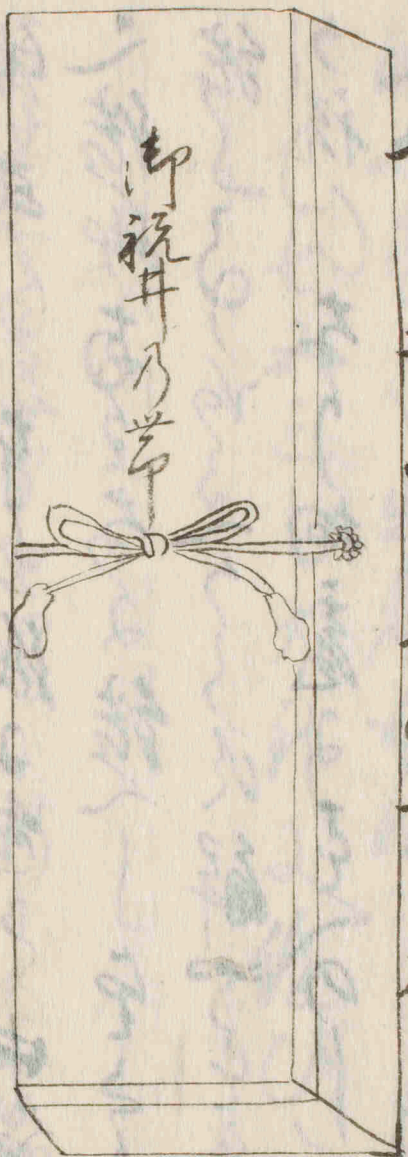
之、  
見、  
として、  
の、  
皇、  
より、  
系、  
桂、  
将、  
葵、  
付、  
下、







流しをさるゝと格骨の種何れも分限は通  
 毛子と一し中しく小袖を流しをさるゝもさへ  
 ○ 又近代色さる帯と白桐の箱入蔵はさるゝ  
 りもあり其時之箱の帯は雅し細く  
 箱は白磁五輪龜松竹と画し細くハツ  
 紅もさるゝ一深赤桐を好みさるゝ  
 を細の色も好まうと一箱の上は白  
 の帯一又ワシと井の帯おともさへ



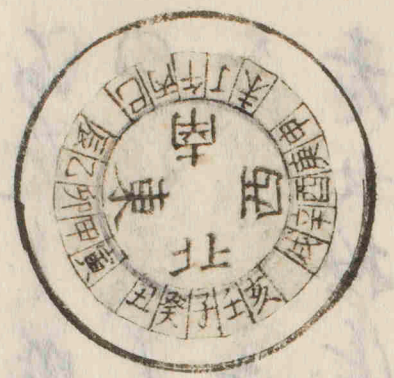
箱寸法一第ニ第ニ  
 より大かまへ  
 深さとも同し事  
 巾のさるゝのさる  
 先のさるゝのさる

○ 又法帯はさるの長サハ八寸幅ハ箱一幅ハ白  
 まくさく端とも不違其後毛子と一は流しを  
 裁りゆハ祝母の後と一ハ祝母の裁とさ  
 り帯もさる帯を用ゑる時の子と一又地  
 をさるゝ右の下と一裁し毛子と一勿論不若  
 其時ハ帯をさるゝにツはさるゝ紙一帯は色中  
 と色引さるゝ流し長府帯中を紙は色流し  
 表はさるゝ一又云帯を流しの後ハツは折て  
 表と裏はさるゝ一は流しさるゝ一は家  
 の先例はさるゝ一は流しはさるゝ一  
 一子安く是れ事  
 ○ 是れ岩田北ひる流女産のち後二二流し

神児の二ツより切紙繕と久遊る繕ふへ  
一 床勝之事

○ 祝の言床よ産神と初詣一籠より一籠より  
初餐と依諸祝儀二床勝の巻よまき巻之  
一 節よまきとまき向ふ方角之事

○ 其日の玉女のうらとくら其日の十二支の九ツ目  
方なり初詣ハその日卯の日なり卯辰巳午  
と算入て亥のうら玉女神なり卯辰巳  
三ツ目なり其日卯辰巳とくら  
巳のうら別々の神のうら一籠よて夫婦  
向ひ合ふ友の圖と見合をへ



玉女の子若鬼門のうら一籠よて夫婦  
より水と湯の申乃方なり一籠よより  
湯より人よまき初詣の神よ向ひまき方  
角よふ均對なまき一籠よ又卯辰巳  
亥のうら一籠よ其年のうら一籠よ向ふへ  
一 座定りて云脚よ鳥の子候よ長の一籠よ  
○ 此は祝よ夫婦一籠よ又略して一籠よ  
或ハ白紙屑より一籠よ裁夫婦の

中央に振袖ひして色を引へし

○ 是れとて先節を履き先出田節外節

と履蓋よ成を女指のし末座に扱ひ

交出居して妻の膝初は座をとり老

女支の右のし一帯を履たよむる妻一帯

をとりて紅白の帯あり古よ妻の右のし

後一帯をとり右の袖より懐中へ入れて

むすむ初るし妻結初て後妻へつるを

何れと時思も先例もするし結の初

の程織と六ヶあうしんしやま

洞ふと帯一と正へし

○ 老女扱係して結をむるも色又先親

臨みへし

○ 又近代帯の役として日出夜老人田長

中なるりありしとて其志小岩

田節と載するし又祝母として果報

しと老女かりし語を老女扱係して

結初るも

○ 以後は意云郷よ赤飯と成と子のし

昆布勝り根根藪うしと色と引渡

出するりもは赤飯は帯を三度何れも妊婦は帯をさす

又例帯の役を司りしとて夫をたなく妊

婦出くす神の字は白ひ帯の役を妊

婦の右の裾を扱へし祝母は妊婦の左の裾

伺作さるる之祝母帯を紐と妊婦此後ハ帯の  
後人ハ後之帯の後人たのひとて更互之右の  
ひと持たりとのひとてハ帯の端を持右のひ  
と持する而を別我右の袖の内ハ納め右の  
ひハ帯の端を持たりと何方の袖ハ納め  
利<sup>聞</sup>神<sup>ノ</sup>向<sup>シ</sup>て無<sup>ニ</sup>病息災其の命長遠天  
下泰平國土安穩法教成終皆令満足  
と唱文して相たりと持する帯の端を妊婦  
の右のひハ後妊婦をより袖の中<sup>ニ</sup>我たり  
のひと後ハ旦して帯を<sup>ハ</sup>端を<sup>ハ</sup>右のひと持  
と右のひとれ帯を右のひハ別更ハ前ハ也  
左右のひとて志免直<sup>ニ</sup>右の服<sup>ニ</sup>

結<sup>ニ</sup>是<sup>レ</sup>神功皇后乃<sup>ハ</sup>此<sup>ノ</sup>帯<sup>ヲ</sup>と<sup>テ</sup>な<sup>サ</sup>れ<sup>ハ</sup>搦<sup>楯</sup>と  
して結肌帯<sup>ヲ</sup>記<sup>ス</sup>り<sup>ハ</sup>云<sup>フ</sup>

傳<sup>ハ</sup>云<sup>フ</sup>神功皇后の<sup>ハ</sup>帯<sup>ヲ</sup>と<sup>テ</sup>な<sup>サ</sup>れ<sup>ハ</sup>搦<sup>楯</sup>と  
云<sup>フ</sup>中<sup>ノ</sup>家<sup>ノ</sup>傳<sup>ノ</sup>の<sup>ハ</sup>祝<sup>ニ</sup>云<sup>フ</sup>と<sup>テ</sup>云<sup>フ</sup>此<sup>ノ</sup>帯<sup>ノ</sup>の<sup>ハ</sup>後<sup>ト</sup>と<sup>テ</sup>  
定<sup>ム</sup>る<sup>ハ</sup>奉<sup>ル</sup>も<sup>ハ</sup>る<sup>由</sup>と<sup>テ</sup>云<sup>フ</sup>也<sup>ハ</sup>他<sup>ハ</sup>武<sup>内</sup>宿<sup>禰</sup>  
是<sup>レ</sup>を<sup>ハ</sup>勅<sup>ニ</sup>搦<sup>楯</sup>と<sup>シ</sup>て<sup>ハ</sup>結<sup>ス</sup>と<sup>レ</sup>ハ<sup>ハ</sup>吉<sup>祥</sup>を<sup>ハ</sup>  
搦<sup>楯</sup>と<sup>シ</sup>て<sup>ハ</sup>又<sup>ハ</sup>云<sup>フ</sup>右<sup>ノ</sup>唱<sup>文</sup>の<sup>ハ</sup>奉<sup>ル</sup>言<sup>ハ</sup>位<sup>ノ</sup>方<sup>ヲ</sup>を<sup>ハ</sup>  
ハ<sup>ハ</sup>多<sup>ク</sup>字<sup>ヲ</sup>を<sup>ハ</sup>加<sup>テ</sup>て<sup>ハ</sup>云<sup>フ</sup>云<sup>フ</sup>物<sup>ハ</sup>息<sup>災</sup>と<sup>テ</sup>唱<sup>ス</sup>ふ<sup>ハ</sup>  
右<sup>ノ</sup>結<sup>楯</sup>右<sup>ノ</sup>法<sup>ヲ</sup>と<sup>テ</sup>知<sup>ル</sup>へ<sup>ハ</sup>中<sup>ノ</sup>世<sup>ノ</sup>ハ<sup>ハ</sup>普<sup>通</sup>又<sup>ハ</sup>帯<sup>ノ</sup>の<sup>ハ</sup>後<sup>人</sup>  
帯<sup>ヲ</sup>を<sup>ハ</sup>より<sup>上</sup>唱<sup>文</sup>して<sup>ハ</sup>帯<sup>ヲ</sup>を<sup>ハ</sup>に<sup>テ</sup>よ<sup>ク</sup>あ<sup>ら</sup>せ<sup>テ</sup>妊<sup>婦</sup>の  
右<sup>ノ</sup>の<sup>ハ</sup>後<sup>妊</sup>婦<sup>ノ</sup>更<sup>互</sup>り<sup>テ</sup>右<sup>ノ</sup>の<sup>ハ</sup>正<sup>法</sup>又<sup>ハ</sup>自<sup>ら</sup>  
結<sup>ス</sup>ふ<sup>ハ</sup>異<sup>名</sup>を<sup>ハ</sup>唱<sup>文</sup>も<sup>ハ</sup>る<sup>由</sup>と<sup>テ</sup>云<sup>フ</sup>

○ 帯を結納めらるる廣蓋等より祝母するも老女  
誰れしも知りてとるに直し三也或は内所  
にも入る

一 着帯早其座より云々

○ 列席の次第客居は主たる居は仕女座をへ

○ 又座配よりより其位退き主母對座とする

又帯の役を用ゆるるときは客居の末座は

帯の役人忌居る居の末座は祝母伺儀

と云へし相三献の祝儀ありて尚人もお伴伴

と云へし

○ 夫婦式三献のより先祝のもの魚三をここの延  
七巻とのせもち出て夫婦の中央は振中を夫の

引渡しの膳を掲げて夫婦は坐する相離り

捲子の役出て末座引出する席は忌居るときはは相見合

離るるを主母の前に出るを座をこりて

夫はを主母の献加へて三献のときを魚を妻

へさすも妻の献加へて三献のとき納るに次は夫

初めの膳を夫婦は坐する祝母の方へは妻

二つ目の七巻るの献のとき加へて三献を合へて

を夫はを主母の献加へて三献のとき納むへし

次は膳の膳を納るに坐する此座は二つ目

の七巻るを主母の献のとき納るに妻はは

妻の献加へて三献のとき納るに相見合は

三つ目の九巻るなるに夫婦は祝母を向



ふもへ

○ 暮日崎法之事 追々傳受をへし 寛之後  
胎衣納之次第 胎衣道具の割法 胎衣表を  
略す

一 忌帯ししてら 夫婦をよ 穢よりしてら

○ 本文之道 忌帯ししてら 妊身よ 法定して  
産穢を 萌をよ 神詣を くるる  
五候 男の 九月 月と 神詣を ころし 子十  
月 尚より 月より 神おを くるり ころし

一 嬰子誕生の後 胎帯の帯を 練り 云々

○ 本文之道 入り 出と 帯の帯を ぬり 一箇を表  
とし かんころし 小紋よ 深る 二箇を 表

○ かんころし 帯の 連 銭 帯 和 右 垣 通し 云々

小児の肝の虫とのそく 藥草のふし 函  
書よ ころし 帯の帯 不 纒の形を 淺 黄  
小紋よ 深る なり 如 図

○ 性 胎 世 帯 帯 結 の よ 繼 行 する よし 後 世

小紋よ 深る 一 帯 白よ 小紋よ 淺 黄  
よ 浅へし 比 淺 黄よ 小紋よ ぬく 出し する へ  
略 成 なり

○ 假 名 表よ かんころし 帯 書て かんころし 帯 續

二 二 二 と 同し 帯 表 完 せ 三 二 二 帯 年 花

とケニヨシと云と同例に志るをふ知古書に  
おんそりとある連中を解と千を形よそ  
めして志する人あり一の笑

○ 是を肝衣とも行衣小袖とも云へり

○ 裁法は、一尺の幅を横ゆり、裁て四尺

二寸は内一ツを身よりあけひとを

身幅八寸あけひとを身長四尺、折り四尺を

袖と袖と襟は裁袖長一尺幅六寸、紐長二尺

幅三寸襟を二寸折れ、幅一尺、身より

積り、紐は四尺通して、兼て裁て、後、横

二ツは別絶、裁る、妻裁、横同前

○ 肝衣は酒肴を添え、襟を二寸、身より

○ 色直しのときは、産忌をぬき、肝衣を

忌をこ、逆世出生のとき、縦襟とする、ま

白衣と忌せ、又直に、肝衣、裁、忌、するも

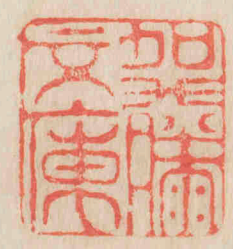
あり

○ 肝衣は家の紋を付るもあり、産忌の

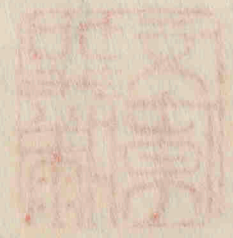
とき、とり、鶴、亀、松、竹、を添へ

○ 妻は、公のまじ、又妻を、紅、梅、を添るも

も、逆世の習を、好、まじ、へ



Faint bleed-through text from the reverse side of the page.



Handwritten text in a cursive script, possibly a historical document or a letter, written in dark ink. The text is arranged in several lines across the page.



